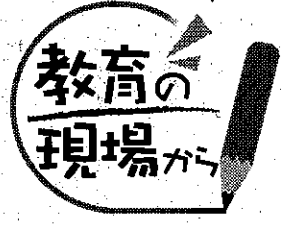


被災地支援 継続は力

福岡女学院大・福岡大院生や学生に聞く

東日本大震災の被災地で、今年も夏休みにボランティア活動をした大学院生や大学生がいる。遠く福岡から、しかも1回限りではない継続支援に意義を見いだしている。現地に行った福岡女学院大(福岡市南区)と福岡大(同市城南区)の大学院生や学生に話を聞いた。



体験伝える役割

福岡女学院大の臨床心理学専攻の大学院生ら15人が8月6日から6日間、岩手県宮古市の仮設住宅などでボランティア活動をした。体を動かすことで被災者が自分で心身の状態を改善できるような手引きをする教室

を開き、ストレスを抱えた子供たちとはシャボン玉やお絵かき、うちわづくりなどをして遊んだ。いずれも専門を生かした活動だ。宮古市に行くのは昨年夏、今年春に続き2回目。子供たちは「また来た!」と喜んでくれたという。引率役の奇恵英教授は「信頼



シャボン玉で遊ぶ子供たちと福岡女学院大の大学院生たち

関係ができた。子供たちも『見守ってくれている』という思いからずいぶん心理的に安定してきました」。修士2年の田中亜弥さん(28)は、2回目の参加だった。ストレスなどから顔面まひになり、一度と治らないと思っていた、というお年寄りの女性のこと



福岡女学院大の大学院生は、子供たちとはお絵かきなどで遊ぶ一方、大人向けには心身の状態の改善の手引きをする教室を開いた。いずれも岩手県宮古市、奇恵英教授提供

深まる現地交流

象徴だったという。「ボランティアの教室を終えた後で『背中から悪いものがとれた』と喜んでくれました」。奇教授は「少なくとも今後3年は続ける」と話す。田中さんも「現地ではかわからないことがある。体験を伝えるのが役目だと感じ

た。院生の間では、最初は準備を手伝い、次の機会には現地で活動、という流れがきている。こうして経験を共有し、継承する。一方、8月21、23日に宮城県南三陸町と気仙沼市で

った成果として、昨年のボランティア隊が知り合った宮司さんの家族から被災者の思いを聞くことができたことを挙げる。福大の場合は、まず大学がボランティアを募集。定員をはるかに超す307人が手を挙げたため、初めて行く学生が優先して選ばれた。出発前、初心者ばかりのボランティア研修の場には、昨年サプリーターを務めた法学部3年の土橋亮太さん(20)の姿があった。「2回、3回と続けて現地に行くことで1回目の意味も出てくる」。こんな思いから自主的に研修に参加し、折に触れて助言した。本村さんは「昨年のボランティアが今年とつながっていることも実感できました」。支援のバトンは福大でもこうして継承されている。(宮崎健二)